

# 『教養と図書館』

理事（総務担当）・副学長・事務局長 渡邊 淳平

昭和59年文部省採用。文部科学省研究振興局学術研究助成課長、独立行政法人日本学術振興会理事等を経て平成30.4.1より現職。



教養と図書館のいずれにも縁遠い人生を送ってききました。それへの後悔の気持ちを込めて書いています。

弘前に来てから、思い切ってお茶を習うことにしました。前から多少興味はありましたが、習い始めてみると幅広い教養が必要であることに気づかされます。お茶では、手前の所作を覚えることも必要ですが、むしろ、喫茶をとりまくしつらえの全体が重要とされています。例えば、茶席に掛ける軸、花、道具の取り合わせといったものですが、季節はもちろんのこと、茶席の趣旨などに応じて考える必要があります、そこに込められた亭主の意図を客が理解しての会話のやりとりが醍醐味ということになります。掛軸一つとってみても、禅語からくるものであれば、まずその知識が必要であり、またそもそも判読できないといけません。ということで、いろいろと勉強を始めたわけですが、自身の基本的な教養のなさに改めて気づかされます。

教養は、こうした私生活面を豊かにしますが、社会的にもますます重要になっていると考えます。最近世界的に社会全体が順調ではなく、政治や企業経営などの面における舵取りが難しくなっています。そうした時にこそ、トップとしての判断には教養の裏付けが求められるはずですが、また、社会全体に教養がおろそかになれば、その発展は望めないでしょう。

現在では、ICTの発展により、様々な情報を得ることが容易になっていますが、情報量が多過ぎて質的にも玉石混淆という問題を抱えています。本やその集まりである図書館はネットに比べて旧来型の手法ではありますが、出版というスクリーニ

ングを経ていることもあり、本から得られる情報には一定の質の高さがあると思われ。また、バラバラと概観する、隣にあるものもついでに手にしてみるといった点では、本や図書館の方がまだまだ優れています。ネットは広範な検索と情報入手の即時性に圧倒的な力を発揮しますが、深みや広がりにおいては、まだ本や図書館の優位性がありそうです。ですから、特に若い学生の皆さんには、在学中に図書館で多くの時間を過ごしてもらいたいと思います。

図書館は古くから、知識を集めることにより、結果として社会の教養を高めてきたわけですが、これからの図書館には、より積極的に教養を高めるための役割を果たしてもらいたいと思います。お茶の話に戻りますが、茶席に活ける花は花屋にあるようなものと違って名前を知らないようなものが多くなります。最近、スマホで花の写真を撮ると画像解析して名前の候補を提示してくれるというアプリを見つけました。なかなかの精度です。ICTの恩恵ですが、日本で開発されたものでないために、和名に弱いところがあったりします。また、古文書の写真から何という漢字かを判読するサイトも見つけましたがまだまだ実用的ではないようです。こうしたものが手軽になれば、教養を高めることに役立つことは間違いありません。技術的には十分可能なので、要はどこかが中心となって取り組むかどうかということかと思っています。文化庁というより、全国の図書館、中でも大学図書館が、社会の教養を支え高めるといふ新しい使命をもって、その活動範囲を拡げていく方が楽しい結果を生むような気がします。